

〈論文〉

「言い表しえぬもの」としての愛の理想

ミシェル・ウエルベックの小説における理想の不描写をめぐる試論

西村 真悟

はじめに¹

ミシェル・ウエルベックの小説は男性中心主義的だとの批判を受けることが多々ある。例えば、『セロトニン』の出版後に次のような批判がなされた。

[ウエルベック] が倦むことなく時事的なものとして書く告知された死、それは白人男性の死である。とりわけ、世界が自分の快樂、換言すれば男根を中心にして回っていると何世紀も前から信じている支配的な人物の死である。

[.....] 本当にフロラン＝クロード・ラブルストの境遇を、より正確に言えば彼が代表する [.....] 「白人おやじ」の境遇を憐れみたいと思うだろうか²。

-
- 1 外国語文献を引用する際、注に邦訳文献を併記していない場合、引用部の訳は引用者によるものである。併記している場合、引用部の訳は基本的にその邦訳文献によるものである。ただし、一部改変した場合や引用全体を引用者が訳した場合にはその都度そのことを記した。また、Flammarion から出版されている全集からウエルベックの著作を引用する場合には、注にて H1 と H2 という略号を用い、著者名は省略した。略号の対応は次の通り。H1 : *Houellebecq. 1991-2000*, Flammarion, « Mille&unepages », 2015. H2 : *Houellebecq. 2001-2010*, Flammarion, « Mille&unepages », 2016.
 - 2 PHILIPPE, Elisabeth, « Houellebecq ou le lent (et nécessaire ?) suicide de l'homme

また一方でウエルベックの小説には絶望しか描かれていないという批判も存在する。もしこれらの批判が正しいものであるならば、ウエルベックの小説とは、西洋白人中年男性の理想が破れた絶望的状况をただ嘆いているだけのものであるように思える。しかしそれならば、なぜウエルベックの小説が30ヶ国語以上の言語に翻訳され、世界中で読まれるという事態³が発生するのだろうか。世界中の人々は「『白人おやじ』の境遇を憐れみたい」のだろうか。このように考えたとき、ウエルベックの小説は上記のように批判されるものとは別の姿を見せる。本論文の目的は、ウエルベックの小説における愛の理想について上記のような批判に反論することで、彼の小説の別の姿を示すことである。なぜ愛の理想に限定するのかというと、愛がウエルベックの小説群の主要なテーマのひとつであることが明白であることに加えて、*Rester vivant* に「愛があらゆる問題を解決する⁴」と書かれているようにウエルベックにとって愛が非常に重要かつ根本的なものとして存在しているからである。したがって本論文ではひとまず、愛の理想に限定して論じる。

まず第1節において、男性中心主義的だとの批判に反論する形で、ウエルベックの小説の主人公たちが一種の反面教師として描かれていることに着目し、一見理想として描かれているものが実はその理想への到達を妨げる幻想として描かれていることを明らかにする。次に第2節において、ウエルベックの小説に対する理想や希望がないという批判はある意味では正しいが、理想や希望を明示しないことこそが世界を変えるためのウエルベックの戦略であることを彼のリアリズムの特徴を検討することで明らかにする。最後に第3節において、愛の理想が「言い表しえぬもの⁵」であることを明らかにする

blanc », *Le Nouvelle Obs*, 2018, <https://bibliobs.nouvelobs.com/critique/20181228.OBS7714/houellebecq-ou-le-lent-et-necessaire-suicide-de-l-homme-blanc.html>, consulté le 23 fev. 2021. [] 内引用者、以下同様。

3 PAYOT, Marianne et al., « Houellebecq superstar mondiale », *L'Express*, 2012, https://www.lexpress.fr/culture/livre/houellebecq-superstar-mondiale_934657.html, consulté le 23 fev. 2021. フランス外での受容については他にも次の文献の第2部で詳しく書かれている。JURGA, Antoine et WESEMAEL, Sabine van (dir.), *Lectures croisées de l'œuvre de Michel Houellebecq*, Classiques Garnier, « Études de littérature des XXe et XXIe siècles », 2017.

4 *Rester vivant*, H1, p.148.

5 本論文では、“un indicible”の訳語として野矢茂樹訳に倣って「言い表しえぬもの」を採用した。ワイトゲンシュタイン(野矢茂樹訳)『論理哲学論考』、岩波文庫、

ことで、ウエルベックの小説が愛の理想の不描写により、逆説的に読者に愛の理想の存在を感受させるものであることを示す。

1

確かに、ウエルベックの小説で明示される女性に対する理想や、それを実際に体現するかのような女性たちは、男性中心的な価値観に基づいて構築されているように思われる。このような価値観に基づく読解には例えば次のようなものがある。『素粒子』と『プラットフォーム』の結末近くで男性主人公たちと相思相愛の女性3人が死んでしまうが、それはウエルベックが女性の死の後に男性の自殺や精神病院への入院を描くことで「これらの男性たちが女性の愛なしではもはや生きることができないということを強調する」ためである。そして、最終的に死んでしまうとしても、「傷つき不健康な男性主人公たち」に「癒し」を提供する女性が存在していたという事実は、「希望が存在することを意味している⁶」。このような読解は上記のような批判を受けてしかるべきだろう⁷。

しかし、ウエルベックが小説内で明示する愛の理想は一種の社会的病理としての幻想、すなわち真の理想追求を妨げるものとして描かれているように思われる。そしてその幻想は幻想であるがゆえに打ち碎かれるのである。第1節ではこのことを明らかにする。

ウエルベックの小説で明示的に主人公たちの理想とされる女性像は男性中心主義的幻想だ。それはまず、優しさや献身としての愛を無条件で与えてくれる女性、つまり母性的な女性であり、そのような愛を求める主人公の姿はウエルベックの全小説に共通である⁸。また、ウエルベックの小説では「伝統

2003、p.148.

6 THUEN, Tonje Sundby, « L'amour et la tendresse féminine selon Houellebecq », La thèse de master, Université d'Oslo, 2007, <https://www.duo.uio.no/handle/10852/25748>, consulté le 23 fev. 2021, p.76 et 80.

7 ウエルベックによる「女性賛美」は「女性や有用な母親の家庭的内での役割」に向けられており、それに対して反フェミニズム的だとの批判が可能であるという見解もある。SOARES, Corina da Rocha, « L'équivoque chez Michel Houellebecq : subtilités d'un personnage ambigu », *Carnets*, 1(2), 2010, p.132. 強調原文。

8 熊谷謙介「ミシェル・ウエルベックとユイスマンスー『服従』における《女性嫌悪》

的な価値観のみならず解放されたタブーなきセクシュアリティが存在するときのみ、愛が存在可能である」こと⁹を加えて考えると、その理想は正確には母であると同時に娼婦であるような女性である。『プラットフォーム』の主人公ミシェルは恋人のヴァレリーに対して次のような感想を持つ。

いい娘だ。僕は思った。情が深く、思いやりのある娘だ。官能的で甘く大胆な恋人でもある。そして万一のときには、慈しみ深く、賢い母にもなるのだろう¹⁰。

ところでこのような女性像、すなわち「母性的な女」や「宿命の女」のような「エキゾチックな女」とはどちらも19世紀小説によって希求された「ブルジョワ階級の男が生み出した幻想^{ファンタズム}」である¹¹。したがって、ウエルベックの小説の主人公が求める理想の女性とは19世紀に生まれた幻想を同時に満たすものである。それは男性中心主義的だ。そしてなによりもまず、幻想なのだ。

しかしながら、ウエルベックはこの幻想に自覚的であるように思われる。なぜなら彼の小説の主人公たちのほとんどが、彼が批判する社会システムやイデオロギーにその内面を支配されているからだ。例えば『素粒子』において、主人公のひとりであるブリュノは、アンヌという女性と結婚したあとも「流行がどんどんセクシー路線になって」いくなかで「どの女を見ても欲望がうず」いてしまい¹²、結局は離婚する。ここには広告あるいは誘惑のシステムの脅威が現れている。1993年に発表したエッセイ内でウエルベックは、広告を「欲望をかき立て、そそのかし」、最終的には欲望そのものに「なる」ことを狙うものだとして、次のように述べる。

をめぐって」、『人文研究』No.196、神奈川大学人文学会、2018、p.14。

9 HANSSON, Virginie, « L'amour dans l'univers romanesque de Houellebecq », *LUP Student Papers*, 2013, <http://lup.lub.lu.se/student-papers/record/3799331>, consulté le 23 fev. 2021, p.32.

10 *Plateforme*, H2, p.283. ウエルベック, ミシェル (中村佳子訳) 『プラットフォーム』、河出文庫、2015、p.320. 以下後者を『プラットフォーム』と省略する。

11 工藤康子 『フランス恋愛小説論』、岩波新書、1998、pp.197-198. ルビ原文。

12 *Les particules élémentaires*, H1, p.737. ウエルベック, ミシェル (野崎歓訳) 『素粒子』、ちくま文庫、2006、p.237. 以下後者を『素粒子』と省略する。

永遠に関するあらゆる概念を否定し、自らを絶え間ない更新プロセスと定義する広告は、主体を蒸発させて生成変化に従順な亡霊に変えることを目的としている。そして、社会生活へのこのような衝動的かつ表面的な参与は、存在欲望に取って代わるだろう¹³。

また、野崎歓は『素粒子』から、「セクシュアリティとは強力な『誘惑のマーケット』にほかならず、そこには非情な競争原理が吹きすさぶのみ」であり、現代社会は「コマーシャルイズムの全面的支配」下であり、「若さと美しい肉体への崇拝に支えられて、誘惑のシステムのみがどこまでも拡張していく」という事実を読み取る¹⁴。まさしくブリュノはこの「誘惑のシステム」を内面化した存在である。さらにブリュノはエゴイズムも内面化している。彼はのちに恋人となるクリスチヤヌと出会った際に彼女から「エゴイストだけど優しい」と評される¹⁵。しかし、物語の終わりに彼は自身のエゴイズムゆえに彼女を死なせてしまう。ブリュノは実際には「優しいけれどエゴイスト」であった。他にも『セロトニン』において、主人公のフロランは女性（あるいは人間全般）を一種の「商品」とみなす¹⁶が、このような人間の商品化も広告についてと同じく、先のエッセイのなかでウエルベックによって指摘されている。

帰属や貞操、堅固な行動規範による束縛から自由になったことで、現代の個人は一般化された商取引システムに乗り込む準備ができている。そのシステムのただなかでは、一義的につまりいかなる曖昧さもなく個人に交換価値を割り当てることが可能となっている¹⁷。

フロランはこのような「商取引システム」を内面化しており、先の批判通り

13 « Approche du désarroi », *Interventions*, H2, pp.863-864. 強調原文。

14 野崎歓『フランス小説の扉』、白水社、2001、pp.222-223。

15 *Les particules élémentaires*, H1, p.696. 『素粒子』、p.192。

16 HOUELLEBECQ, Michel, *Sérotinine*, Flammarion, 2019, pp.65-66. ウエルベック, ミシェル (関口涼子訳) 『セロトニン』、河出書房新社、2019、pp.51-52. 以下それぞれを *Sérotinine*, 『セロトニン』と省略する。

17 « Approche du désarroi », *Interventions*, H2, p.853. 強調原文。

彼は男性中心主義的な考えを持っている。また、『ある島の可能性』のダニエル1は「肉体的な愛が消えたとき、すべてが消える¹⁸」という唯物論的意識により恋人のイザベルと別れ、のちに若く肉体的に魅力のあるエステルと交際をはじめ。このように、ウエルベックの小説の主人公たちは作家自身が指摘している社会システムやイデオロギーにその内面を支配されている。彼らは一種の反面教師のようである¹⁹。

さらに、このような内面化はウエルベックによって一種の社会的病理として描かれている。『素粒子』において、ブリュノは次のように評される。

ブリュノを一人の個人と考えることができるだろうか？ [.....] ブリュノは一人の個人とみなされうるとしても、別の視点に立つならば、ある歴史的展開の受動的要素にすぎないとも言えるのだった。彼の抱く動機、価値、欲望。そのいずれもが、同時代人に対し彼をいささかも差異化するものではなかった²⁰。

また野崎は、ウエルベックによってブリュノと同様に『素粒子』のもうひとりの主人公ミシェルも「完全に歴史的に限定されたものとして提示」されていると指摘する²¹。主人公像のこのような設計は、ウエルベックの作品全体を貫く特徴と関係している。Agathe Novak-Lechevalierによれば、ウエルベックの作品全体を貫く目的のひとつは「世界を知ること」であり²²、そのため

18 *La possibilité d'une île*, H2, p.426. ウエルベック, ミシェル (中村佳子訳) 『ある島の可能性』、河出文庫、2016、p.80. 以下後者を『ある島の可能性』と省略する。

19 Sabine van Wesemael は次のような指摘をしている。「登場人物たちを通して、ウエルベックは社会や社会生活に関する批判を表明する。ありのままを知覚され告発された悪に対するいかなる代替物をも彼らが作り出すことができなければできないほど、その批判はますます辛辣なものとなる。ほとんどの場合、彼らは自身の現実に立ち向かうには無力である。あるいは、[.....] 別の人生のシナリオに幻想を抱く方を好んでいる」 WASEMAEL, Sabine van, « Sérotonine de Michel Houellebecq : prédiction du destin tragique de la civilisation occidentale », *RELIEF - Revue Électronique de Littérature Française*, 13(1), 2019, <https://www.revue-relief.org/articles/abstract/10.18352/relief.1033/>, consulté le 23 fev. 2021, pp.61-62.

20 *Les particules élémentaires*, H1, p.741. 『素粒子』、p.242.

21 野崎、前掲書、p.230.

22 NOVAK-LECHEVALIER, Agathe, *Houellebecq, l'art de la consolation*, Stock, 2018,

に次のようなことが行われる。

さまざまな人物たちから行動規則を導き、次にこれらの規則からそれらを支配する諸原理を明らかにする。[ウエルベック]は多様なものから出発し一般的なものへと上昇する²³。

このような一般化によってウエルベックは登場人物たちの苦しみを「個人の過ちに対する耐えがたい罰としてよりもむしろ、ひとつの世界的な『イデオロギー的葛藤』²⁴の結果として」描いている²⁵。以上のことより、ウエルベックの小説における主人公たちの社会システムやイデオロギーの内面化は個人的なものではなく歴史的あるいは社会的なものとして、故意に描かれていると言えるだろう。したがって彼らの抱く幻想もある種の社会的病理としてあえて小説内に描かれているのではないかと考えられる。

そして、その幻想は幻想であるがゆえに突如打ち砕かれ、消滅する。そこには作者の影が色濃く現れている。先に見たように Tonje Sundby Thuen は、『素粒子』のアナベルとクリスチヤーヌ、『プラットフォーム』のヴァレリーの死には、男性にとって女性が必要であることを強調したいという作者の意図があるとする。また、女性が死ななくとも、Virginie Hansson は『地図と領土』におけるオルガと別れるというジェドの決断は彼自身によるものではなく「カップルの不可能性を主張する著者」の「意志」によるものであるように思えると述べる²⁶。ウエルベックの小説において幻想を体現した女性たちが舞台上から消えるとき、そこに作者の何らかの意図があることは確かであろう。ただし、それが両者の述べるようなものではないことは今までの議論から明らかである。幻想を体現した女性たちが消えてしまうのは、彼女たちが幻想の産物、儚い幻影でしかないからだ。その意図は、男性中心主義的な幻想を追い求めても本当に求めるべき愛＝理想の愛にたどり着くことはできないと示すことにある。

その証拠となるのは、驚くべきことに『服従』である。その結末におい

pp.155-156.

23 Ibid., p.165.

24 *Les particules élémentaires*, H1, p.591. 『素粒子』、p.77.

25 NOVAK-LECHEVALIER, op.cit., p.169.

26 HANSSON, op.cit., p.31.

て、自身がイスラム教徒になることで自らの結婚相手としてあてがわれるであろう女子学生たちのことを思いながら「彼女たちは、愛されるにふさわしいだろうし、ぼくのほうも、彼女たちを愛することができるだろう」と主人公フランソワは語る²⁷。一見、ウエルベックの小説内で主人公たちが追い求めてきた幻想がついに現実化するかのように見える。もちろん現実化が予感されるこの幻想は男性中心主義的なものである。熊谷謙介は『服従』を「食」に注目してユイスマンスと比較分析することでそのことを指摘している。曰く、この作品では「食卓のユートピア」が希求されているが、そのユートピアにおいては、料理を提供するのはほとんど常に女性であり、つまりここには女性に対する「純粋な贈与」の期待が現れており、ゆえにこの「食卓のユートピア」は「女性にとってのディストピアになりかねないのではないか²⁸」。また結末部でフランソワによって、彼に改宗を勧めたルディジェの妻マリカの「ミニパイ」だけでなく、もうひとりの妻アイシャの「身体的な美点」が思い起こされている²⁹ことから分かる通り、イスラム教徒になることはフランソワにとって「食」と「性」のどちらの幻想も現実にできる手段として認識されている。しかしながら、フランソワの予感は条件法で書かれることで意図的に両義的なものとなっている。ウエルベックは『服従』の出版に際したインタビューでインタビュアーの「この本は極めて悲しい」という意見に対して次のように答える。

ええ、秘められた悲しみは非常に強いものです。わたしの考えでは、両義性は最後の文で最高潮に達しています。つまり、「ぼくは何も後悔しないだろう」という文は実際のところまさに逆の意味で理解することができます³⁰。

Agathe Novak-Lechevalier は『素粒子』や『プラットフォーム』の最後の一

27 HOUELLEBECQ, Michel, *Soumission*, Flammarion, 2015, p.299. ウエルベック, ミシェル (大塚桃訳) 『服従』、河出文庫、2017、p.314. 以下それぞれを *Soumission*, 『服従』と省略する。

28 熊谷、前掲論文、p.35.

29 *Soumission*, p.296. 『服従』、p.311.

30 « Un suicide littéraire français », *Mediapart*, 2015, <https://blogs.mediapart.fr/sylvain-bourmeau/blog/020115/un-suicide-litteraire-francais>, consulté le 23 fev. 2021.

文にも同じような効果があることを示し、次のように結論付ける。

したがって、小説の最後には一種の意味の不安定性が据えられるのであり、それは明示的に言われていることとはまったくの逆を考慮に入れることを読者に強いるのである³¹。

確かに『服従』の結末が両義的であるとしても、今まで述べてきたような幻想を追求することによっては理想の愛にたどり着けないということをウエルベック自身が考慮に入れているのは確かであろう。そしてそれゆえに、アナベルやクリスチャーヌ、ヴァレリーの死やジェドとオルガの別れに込められた意図は、そのような事実を示すことなのだと言っているのではないか。

ウエルベックの小説内には一見、男性中心主義的な愛の理想が描かれているように思える。しかしそれは理想ではなく、社会的病理としての幻想である。幻想に囚われた男性主人公たちはそれを追い求め、結局は理想の愛にたどり着けない。このことを示すためにウエルベックは愛の幻想を小説内に描き出す。そこに愛の理想は描かれていないのである。

2

第1節で明らかになったように、ウエルベックの小説に愛の理想は描かれていない。したがって、ウエルベックをはじめとする「鬱病主義」の作家たちに対する、理想や夢がないという指摘は、ひとまず愛に関してならば、そしてそれらが描かれていないという意味においてならば、正しいと言える。「鬱病主義」とは『素粒子』が出版された際に Jean-Marie Rouart が名付けた、同時代の作家たちの傾向のことである。Rouart は Jean-Claude Lebrun との対談のなかで次のように述べる。

「鬱病主義」とは絶望の存在形式のひとつです。ロマン主義には理想や夢があった一方で、鬱病主義にはもはやそれらが存在していません。現実が理想というものを破壊したのです。

31 NOVAK-LECHEVALIER, op.cit., p.261. 強調原文。

Rouart によれば、これまでの文学では、それが反動主義者やリベルタンによるものだったとしても、「野心を刺激すること、夢を刺激すること」が行われてきたが、「鬱病主義」は、「状況を確認するだけ」であり、そこにはその状況を、世界を変えようという意志がない。Lebrun も「鬱病主義」においては「状況はあるがまま受け止められ、それらを凌駕することができる」と想像されることがない」とする。Lebrun は次のように述べる。

[鬱病主義の作家たちからは、] 希望というものがふたたび閉ざされてしまった印象を受けます。つまりこれらの作家たちの何人かにおいて、[.....] 文学がはじめてもはや人間存在のためにも社会のためにも新しい可能性を提案することができなくなってしまったと感ずるのである³²。

しかし、「新しい可能性」が描かれていないことを理由に、作家に世界を変えようという意志がないと言えるのだろうか。「状況を確認する」ことに意味はないのだろうか。第2節では、ウエルベックにそのような意志があること、そして「状況を確認する」ことこそが世界を変えるための第一歩であるとウエルベックが考えていることを明らかにする。

ウエルベックは、インタビューで自らの作品の「主導的、強迫的な方針」を尋ねられた際にこう答えている。

何よりもまず、世界が分離や苦しみ、悪に基づいているという直観です。それから、その状況を描く決意、さらにはたぶん、それを凌駕する決意だと思います³³。

ウエルベックには、状況を、世界を変えようという意志がある³⁴。そしてそ

32 ROUART, Jean-Marie et LEBRUN, Jean-Claude, « Une littérature de rupture », *regards.fr*, 1999, www.regards.fr/acces-payant/archives-web/une-litterature-de-rupture,1252, consulté le 23 fev. 2021.

33 « Entretien avec Jean-Yves Jouannais et Christophe Duchâtelet », *Interventions*, H2, p.877.

34 Wesemael は次のように述べている。「『セロトニン』においても、他のすべてのウエルベックの小説においてと同じく、筋書きの背景に啓蒙的意図がはっきり示さ

の手段として「状況を描く」ことが選ばれている。彼は、デビュー作であるラヴクラフトに関するエッセイのなかで「人生は苦しみと失望に満ちているものだ。したがって、あらたなりアリズム小説を書くことは無益である³⁵」と書いているにもかかわらず、現実世界を小説で描いてきた。この「転向」の理由を Novak-Lechevalier は、「苦痛を乗り越えたいのならば、まずはその状態を確認することが重要である」という考えにウエルベックが至ったからではないかと考える³⁶。それに至る道筋は不明であるが、この「転向」自体は当エッセイと同年に出版された、読者に対して詩人になれと語りかける *Rester vivant* の次の一節にすでに表れている。

世界が苦しみで構成されているのは、何よりもそれが自由であるからだ。苦しみはシステムの諸部分が自由に機能することの当然の帰結である。あなたはそのことを知り、言わなければならない³⁷。

世界が苦しみに満ちていることを知らなければならない、そしてそれは言い表されなければならない。では、言い表すこと、状況を確認し描くことはどのように世界を変えることへと繋がるのだろうか。

この疑問を解決するために、まずはウエルベックのリアリズムの特徴を把握しよう。Novak-Lechevalier は、ラヴクラフトの怪奇小説とウエルベックのリアリズムのあいだに「証言」という共通点を見出している。彼女は、ラヴクラフトの物語で多用されるモデルを次のように説明する。

ある人間が残虐で、理性を超えた、怪物的な現象の出現を確認する。そして、この暴力と戦うには自分が無力であることを理解する。最後には自身の命が奪われるだろう。しかし、自らの犠牲を無駄にしないために、死ぬ前に体験したことが記された証言を残す。読者が手にしているのは

れている。作家はふたたび唯物主義や個人主義、風紀悪化に対する改善運動に乗り出す」 WESEMAEL, op.cit., p.57.

35 H.P. Lovecraft, H1, p.21. ウエルベック, ミシェル (星埜守之訳) 『H・P・ラヴクラフト 世界と人生に抗って』、国書刊行会、2017、p.39. 以下後者を『H・P・ラヴクラフト』と省略する。

36 NOVAK-LECHEVALIER, op.cit., pp.110-111.

37 *Rester vivant*, H1, p.129.

この証言である。

一方でウエルベックは、雑誌に掲載された Lakis Proguidis の質問に対する返答のなかで、「自らの無能力を示しながらも」「怪物的で世界的な欠如」について言表する「最小のメッセージ」を残すということをひとつの使命であるかのように書いており³⁸、この「最小のメッセージ」はラヴクラフト的「証言」と「類似性」を持っていると Novak-Lechevalier は指摘する。確かに「証言」は、怪物を前にした者の、証言することしかできないという「無能力」を示すものかもしれない。しかし、「それは怪物の姿を見えるようにする唯一の手段である」。そして、ウエルベックがラヴクラフトの小説に見出した³⁹ ように、この「証言」には「まなざしの変容」をもたらす力がある⁴⁰。

「まなざしの変容」、それは楽観主義からの脱却である。「ウエルベックの世界においては、幻想と真実を気取る偽の価値観とが社会を腐らせている⁴¹」。インタビューで自身の悲観主義に関して問われたウエルベックはこう答える。

[.....] 明らかに人類は短期間のうちに破局へと、恐るべき状況のなかへと身を投じています。我々はもうすでにそのなかにいるのです。[.....] この破滅に我々をけしかける熱狂には目を見張るものがあります。それは本当に奇妙です。[.....] したがって、まず手始めに空虚な楽観主義を根本的に排除することは正当なことです。[.....] 人々は状況が信じていたものよりもより一層奇妙であると理解するでしょう。世界に対する誤ったイメージに導かれ、我々は災厄へと進んでいます。そしてそのことに誰も気がついていないのです⁴²。

「世界が分離や苦しみ、悪に基づいている」と言い表すこと、「怪物的で世界的な欠如」を「証言」することは、人々を「破滅」へと「けしかける」「世

38 « Lettre à Lakis Proguidis », *Interventions*, H2, p.966.

39 *H.P. Lovecraft*, H1, p.27. 『H・P・ラヴクラフト』、p.48.

40 NOVAK-LECHEVALIER, op.cit., pp.150-153.

41 WESEMAEL, op.cit., p.63.

42 « Entretien avec Jean-Yves Jouannais et Christophe Duchâtelet », *Interventions*, H2, pp.884-885.

界に対する誤ったイメージ」、すなわち「楽観主義」を排除するために行なわれる。「恐るべき状況」の「確認」こそが、人々に「まなざしの変容」を引き起こすものであり、世界を変えることに繋がるのだ。「まなざしの変容」をもたらす「証言」、それこそがウエルベックのリアリズムの特徴であり、世界を変えるために彼が用いる戦略なのである。

今までの議論により、ウエルベックの小説内で愛の理想や夢が明示されないのは、それらが読者を楽観的にさせてしまうものであるからだと考えられる。彼の小説に描かれる愛の幻想に振り回される主人公たちはまさに、愛に対する「誤ったイメージ」によって「災厄」へと進み続け、最終的にそこに至ってしまう存在である。第1節で示したように、愛の幻想は理想の愛への到達を妨げる。それは幻想が、理想の愛の「怪物的で世界的な欠如」から人々の目を逸らすからである。例えば、物語を通して世界そして愛に対して悲観的な意見を表明しつつける『プラットフォーム』のミシェルはそれでも、ヴァレリーに愛の希望を見出す。しかし彼が「僕は、ひとりの女性とともに生き存え、彼女に愛着を持ち、彼女を幸せにしようとすることができる」⁴³と楽観した瞬間、幻影としての彼女はこの世から消え、彼は「破滅」へと至る。愛の幻想に囚われた結果、「破滅」へと至るのである。したがってウエルベックは愛に関して、「怪物的で世界的な欠如」だけでなく、幻想ゆえにそこから目を逸らす人々の存在をも「証言」していると言える。彼の小説において、主人公たちの恋愛の大半はまるでひとつの例外、理想の愛が欠如した世界における希望のようである。しかし、希望のように見えるその例外は実のところ幻想であり、その幻想は世界に理想の愛が欠如しているという事実を覆い隠してしまう。ゆえに、この世界、この「状況」を変えなくてもまだ理想の愛が出現する余地はあるという楽観的な見方が生じる。それは主人公たちを「破滅」へと導く「まなざし」である。この「破滅」を免れるためには、つまり主人公たちと異なる道を進むためには、「怪物的で世界的な欠如」を直視しなければならない。したがって、読者を楽観的にさせる愛の理想や夢がウエルベックの小説に描かれることはない。彼は *Rester vivant* のなかで次のように語りかける。

43 *Plateforme*, H2, p.324. 『プラットフォーム』, p.368.

愛の欠如の奈落へと至りなさい⁴⁴。

「愛の欠如の奈落」に至ること。ウエルベックにとって、それが世界を変える第一歩なのである。

3

第2節では、ウエルベックの小説内で愛の理想や夢が明示されない理由が明らかとなった。それは、理想の愛の欠如を直視することが世界を変えるためにまず必要なことだからであった。しかし、世界を変えるための第一歩を踏み出した我々はその後どこへ向かえばよいのだろうか。この世界に欠如していて、ゆえに目指すべき愛の理想とは、どのようなものであろうか。確かに、Rouart たちが指摘するようにそれらは明示的に描かれない。しかしながら、「新しい可能性」が描かれていないからといって、その小説がそれを読者に喚起させていないと考えることは早計ではないだろうか。第3節では、ウエルベックの小説がどのように読者に愛の理想、そして「新しい可能性」を感受させるのかを明らかにする。

Novak-Lechevalier はウエルベックに関する著書全体の結論として、ウエルベックの作品は「言い表しえぬもの」を読者に感受させるものであると述べる。「言い表しえぬもの」とは、もちろんウイトゲンシュタインの『論理哲学論考』から取られた概念である。ウエルベックは *Le Figaro* に寄稿した文章のなかで、ニーチェ、コントと並べてウイトゲンシュタインの名を引用するのが好きな著述家として挙げている⁴⁵。実際に『地図と領土』では「わたしが語るこのできないものについて、わたしは沈黙を余儀なくされる」と引かれている⁴⁶。また、『ある島の可能性』ではプラトンの『饗宴』が引かれるが、そこには「[アンドロジナスの半身それぞれ]の魂は、明らかに[愛欲とは]別のものを求めている。それは言うこのできないものだが、両者が見分け、見分けさせるものである」と書かれている⁴⁷。以上の事実を確認

44 *Rester vivant*, H1, p.130.

45 « Philippe Muray en 2002 », *Interventions*, H2, p.1043.

46 *La carte et le territoire*, H2, p.1442. ウエルベック, ミシェル (野崎欽訳) 『地図と領土』、ちくま文庫、2015、p.412. 以下後者を『地図と領土』と省略する。

47 *La possibilité d'une île*, H2, p.820. 『ある島の可能性』、p.518. 全訳引用者。

したうえで Novak-Lechevalier は、『論理哲学論考』においても『饗宴』においても「言い表しえぬもの」の存在が認められていることに注目し、「したがって実際には、『語ることのできない』ものは完全に到達不能であるというわけではない」と述べる。そしてウエルベックの作品には、書かれていないもの、「言い表しえぬもの」を、読者に「ほのめかす」ことで感受させる力があるとする。

言表されていない欲望の対象が何であるかをほのめかすこと。これが、ウエルベックのエクリチュールの最も秘密の部分である。

ウエルベックは「言い表しえぬもの」を「ほのめかす」。それは「言い表しえぬもの」の存在を読者に示し、それを感受させる行為である⁴⁸。

では、その「言い表しえぬもの」とは何であるのか。それはどのようにほのめかされるのか。そして、ほのめかされた先に何があるのか。Novak-Lechevalier は、「言い表しえぬもの」を「我々の世界から排除されているように思えるもの、美や道徳、愛」であるとする⁴⁹。したがってまずひとつ目の問いに対しては、そのひとつに愛の理想を挙げてよいだろう。幻想の蔓延した「恐るべき状況」において愛の理想を言い表すことは困難である。Christos Grosdanis は、ウエルベックの小説内で理想とされる愛は、西洋文学で描かれてきた「情熱的な愛」とは異なる「避難所としての愛」であり、その理想は『地図と領土』のジャスランとエレヌという夫妻において実現されていると述べる。さらに、それが「共通の理想」のように思えるとジャスランが述べていると指摘したうえで、この変化を「社会のなかに見られる、そしてウエルベックが掴むことのできた理想の変化」であるとする⁵⁰。しかし、それは誰にとっての理想であるのか。ジャスランとエレヌが仲の良い夫妻であることは確かであるが、その関係を保証しているものはジャスラン

48 NOVAK-LECHEVALIER, op.cit., pp.261-267.

49 Ibid., p.267.

50 GROSDANIS, Christos, « Le thème du couple heureux dans l'œuvre romanesque de Michel Houellebecq », dans WESEMAEL, Sabine van et VIARD, Bruno (dir.), *L'Unité de l'œuvre de Michel Houellebecq*, Classiques Garnier, « Études de littérature des XXe et XXIe siècles », 2013, pp.231-240.

の「五十歳を過ぎてなお、力強く長持ちする勃起力⁵¹」とエレーヌの「シリコン豊胸をしたバスト⁵²」である。また、エレーヌが大学で教鞭を執っていると、家庭内で料理を用意するのは常に彼女である。これを社会に「共通の理想」と見なすことはできるだろうか。

さらに、『服従』において前者と似たような仲の良い夫妻として登場するタヌール夫妻は、より顕著に男性中心主義的である。主人公フランソワは当初、大学の同僚であるマリー＝フランソワーズ・タヌールとの会話中に彼女の「地の精ノームのような嘲笑」が「彼女を一層醜く見せた」と内心で思っており、彼女への彼の評価は低い⁵³。ところが物語の中盤、イスラーム政権が誕生すれば彼女が大学で教授職を続けられないだろうことが分かった後にタヌール夫妻と食事をもにすると、彼女に対する評価はがらりと変わる。彼女の笑みは「大きな微笑み」と評価される。また、物語の前半ではおしゃべりだった彼女は、フランソワと夫アラン・タヌールの会話にはほとんど参加せず、料理をし、夫を「好意に満ちた目で」眺めており、フランソワは彼女の料理を絶賛する⁵⁴。もちろん当の夫妻たちにとっては、この愛の形が快適であるかもしれない。しかし、やはりそれは第1節で見たように男性中心主義的な幻想であり、理想の愛とは言えない。このように、「恐るべき状況」において愛の理想だとして明示されるものは実のところ幻想でしかありえない。したがって、ウエルベックの描き出す「状況」において、愛の理想は「言い表しえぬもの」とであると言える。

次に、その「言い表しえぬもの」をウエルベックがどのようにほのめかすのか、ほのめかされた先に何があるのかを考察する。Novak-Lechevalierは、「詩」の力によって「見せかけの矛盾を止揚すること」で「言い表しえぬもの」を「ほのめかす」のだとする⁵⁵。しかしここでは、今までの議論をもとに別の方法を示したい。ウエルベックの小説では理想の愛の「怪物的で世界的な欠如」が描き出されていることが第2節で明らかになったが、まさにその欠如を描き出すということ、それを直視させることこそが「言い表しえぬもの」をほのめかす方法であると言えるからだ。なぜなら、「何か欠如している」

51 *La carte et le territoire*, H2, pp.1355-1356. 『地図と領土』、p.312.

52 *Ibid.*, pp.1384-1386. 同書、pp.343-345.

53 *Soumission*, p.79. 『服従』、p.83.

54 *Ibid.*, pp.151-163. 同書、pp.158-173.

55 NOVAK-LECHEVALIER, *op.cit.*, p.266.

と人が感じるとき、それと同時にまさにその「何か」の存在が感知されているからである。愛の理想が欠如している「状況」を直視し、今の「状況」のままではそれに到達できないと理解するまさにそのとき、愛の理想の存在が感受されているのである。もちろん、今までの議論で示してきた通り、それが存在しているのは今の「状況」においてではない。しかしこの存在の感受は、別の「状況」には愛の理想が存在していることを示している。ここにおいて「新たな可能性」が開かれる。それは希望となるはずだ。

したがって、「証言」としてのウエルベックの小説は「怪物的で世界的な欠如」を直視させるだけのものではない。それは、「言い表しえぬもの」としての愛の理想をほのめかすものでもある。それは、「新しい可能性」、愛の理想への到達可能性を人々に喚起させるものである。それは、「恐るべき状況」では言表不可能ゆえに到達不可能な愛の理想に、世界を変えることによって到達できるかもしれないという希望を人々の心にもたらすものである。

『セロトニン』の最後の3段落は以上のことを逆説的に示しているように思える。

神は現実にはぼくたちの面倒を見て、絶えずぼくたちのことを考え、時折非常に正確な指示を出す。ぼくたちの息を止めるほどに胸に流れ込む愛のほとぼしり、その天啓、そのエクスタシー、[.....] これらの現象は、その指示のこれ以上ないほど明確な徴である。

そして今日、キリストの立場から考えると、人々の心が無感覚になるのを見て幾度となく苛立つのも分かる——人々は誰もが徴を持っているのに、気がついていないのだ。その上この私がそんな哀れな者たちのために自分の人生を与えなければならないのだろうか。それほどまでにはつきりと説明してあげなければならないのだろうか。

どうもそうらしい⁵⁶。

まるでウエルベック自身の苛立ちが現れているかのようなようである。今までの議論に従えば、この「徴」とは、彼の小説によってほのめかされる愛の理想のことであると言えるだろう。その愛の理想は世界を変える希望をもたらすも

56 *Sérotonine*, p.347. 『セロトニン』, p.288. 強調引用者。訳一部改変。

のであった。だがそれは、「恐るべき状況」においては言表不可能である。したがって、ウエルベックの小説内で「はっきりと」示されては来なかった。ゆえに、「無感覚」な心では無意識のうちに感受したとしてもそのことに気がつかない。この最後の3段落はウエルベックの一種の敗北宣言のように読める。しかしながら、ここで明らかになることは、彼が「言い表しえぬもの」としての愛の理想をほのめかしつづけてきたということなのである。

おわりに

第1節では、ウエルベックの小説で男性主人公たちが抱く男性中心主義的な愛の理想が、実際には愛の理想への到達を妨げる幻想として描かれていることを明らかにした。またそこから、彼の小説には愛の理想が明示されていないことを示した。第2節では、ウエルベックにとって現実を直視することが何よりも重要であることを確認し、世界を変えるために人々が直視したがない現実を小説内で描き出しているということを明らかにした。また、愛の理想が彼の小説内で明示されないのは、「恐るべき状況」において明示される愛の理想が人々の目をその欠如から逸らしてしまう幻想にすぎないからであると示した。第3節では、愛の理想とは「恐るべき状況」においては言表不可能なものであることを確認したうえで、ウエルベックの小説はその欠如を描き、人々に直視させることで逆説的に愛の理想の存在を感受させるものであることを明らかにした。それがどのようなものであるかは分からない。どうすれば到達できるのかも分からない。しかし、ウエルベックが読者に「確認」させることは、今の「状況」においてはそれらの疑問が解決されることは決してないということだ。ならば、世界を変えるしかない。以上のことより、ウエルベックの小説は愛の理想の不描写により、読者にそれを感じさせ、世界を変えるための意志を築く希望を抱かせるものであると言える。ウエルベックは絶望を描くことにより希望を生む作家なのである。しかし『セロトニン』の最後の3段落で示唆されるように、その営みは困難を強いられている。